

# 鉄斎と茶の湯

前期 2019年4月6日(土)～5月12日(日)  
後期 2019年5月17日(金)～6月23日(日)  
会場 鉄斎美術館別館「史料館」  
開館時間 9時30分～16時30分 会期中無休



9 休師訪ノ真図



8 梅山幽趣図

近代文人画の巨匠・富岡鉄斎（1836～1924）は、中国・日本の喫茶文化に造詣が深く、とりわけ文人煎茶に精通していたことは周知のとおりである。他方、日本独自の総合芸術として発展した茶の湯の世界にも深い理解を示し、関係の作品を数多く遺している。

**堺と茶の湯** 学問の道を志した鉄斎は、文久2年（1862）、京都・聖護院村の大田垣蓮月の旧居に私塾「誠之塾」を開いた。儒学を講じるかたわら、訓詁を旨とする著作活動に励み、慶応2年（1866）に『孫呉約説』、翌年には「宜興瓷壺譜」「文房清約図」「桑苧遺韻」を合わせた煎茶書『銕莊茶譜』（竹苞楼）を上梓する。慶応3年版『平安人物志』の「儒家」ならびに「詩」の部に名が掲載され、儒者としてようやく世に知られるも、私塾の収入だけでは思うにまかせず、画を描いて生計を立てていた。

この頃の作品のひとつに、『菟道製茶図・粟田陶窯図』（No.1）がある。茶所として名高い京都・宇治の製茶の様子と粟田口の陶窯の情景を描いた対幅になり、画賛はそれぞれ、煎茶に精通した江戸後期の文人画家・田能村竹田、京焼の陶工・青木木米の語と画に拠っている。先達を通じて、鉄斎が茶および茶器の製造、加工の行程にも興味を深めていたことが知られる。

鉄斎が本格的に茶の湯へ関心を寄せたのは、おそらく明治9年（1876）から14年まで在勤していた大鳥神社宮司時代であったと考えられる。大宮司として大鳥神社や堺県内の荒廃した神社の復興に精力を傾ける一方、京都とは異なる歴史や文化に触れ、見聞を広めた。

泉州堺の地はいうまでもなく、茶の精神的な基盤を禅に求め、わび茶を発展させた豪商で茶人の武野紹鷗（1502～55）、その大成者である千利休（1522～91）の出生地であった。鉄斎は、紹鷗、利休が修行した南宗寺を訪れ、利休の出所である堺今市町（現在の宿院西1丁）の豪商納屋の模刻印「今市なや」を入手するなど、ゆかりの名所や品々を調査している。興隆にともなって町衆にも広がりを見せた茶の湯を、地域の歴史文化として捉えていた。堺で発展した湊焼についても、陶工・八代上田吉右衛門（？～1906）と交流を図り、合作になる扁額「盪而不薦」（1880年）を大鳥神社に奉納していて、伝統を保持する者への理解が窺える。

**北野大茶湯研究** 明治14年12月、兄の死を機に官を辞して帰洛した鉄斎は、翌年には京都室町一条を永住の地と定め、書画の揮毫と読書中心の生活にはいる。同15年、青年時代に大和絵の手ほどきを受けたとされる浮田一蕙（1795～1859）の《北野大茶湯之図》（北野天満宮蔵）を模写する機会を得る。北野大茶湯は、豊臣秀吉が天正15年（1587）10月1日に京都の北野天満宮と社頭の松原で催した大寄せの茶会で、利休、貫などの茶人はじめ、全国から貴賤を問わず数寄者を集めて、1500軒余りの数寄屋、

茶屋を建てて客をもてなしたという。

これを契機に、鉄斎は大茶湯にまつわる調査研究に熱心に取り組み、一蕙本ならびに諸本の記述を斟酌しながら、創意に



6 北野大茶湯図

富んだ自身の北野大茶湯図を繰り返し描いた。このうち、もと風炉先屏風の《北野大茶湯図》(No.6)は、金砂子地に華やかな茶会の様子が描かれ、天満宮の屋根、鳥居、朱塗りの大傘の朱色が目に鮮やかである。賛には大茶湯の高札と御定書が記されている。

鉄斎は大茶湯関係の文献を博搜する一方、ゆかりの茶室や茶器の実地検分にも努めた。大茶湯にて建てられた茶室「東陽坊」は、茶を利休に学び、長次郎作黒楽茶碗「東陽坊」を所持したことで知られる天台僧・東陽坊長盛(1515～98)の好みであるといわれる。



28 白菊香合

後年、茶室は北野の地を離れ、明治33年には建仁寺方丈裏庭に移築される。この際、鉄斎は茶室の外観(No.4)と間取り図を写して、約310年前に京都で催された大茶会の一端を検証しようと試みている。なお鉄斎は、東陽坊作とされる《白菊香合》(No.28)を愛玩していた。

茶人の逸話 元禄14年(1701)に刊行された茶書『茶話指月集』(No.30)は、鉄斎の座右の書のひとつであった。宗旦四天王の一人である藤村庸軒(1613～99)が伝え聞いた茶話を、門人で女婿の久須美疎安が筆録したもので、千利休、千宗旦をはじめとする茶人の言行を伝えている。なかでも、北野大茶湯で直径一間半に及ぶ朱塗りの大傘をたてて茶席を設け、秀吉を喜ばせたという奇行で知られる茶人・ノ貫に、鉄斎は強い関心を抱いていた。《休師訪ノ貫図》(No.9)は、同書からノ貫所持の手取釜と井戸に関する逸話を賛に引き、親交のあった利休が山科のノ貫を訪ねた時の情景を、雄渾な筆致で描きだしている。鉄斎は、茶法に拘らないノ貫のわび茶に共感を覚え、その創意になる手取釜も所持していた。『茶話指月集』のみならず「長闇堂記」、「茶事秘録」ほかの茶書にみえる奇行や逸話を鉄斎は愛好したが、傍証したうえで画題にとりあげ、《茶事秘録豊公秘話図》(No.2)、《宗旦狐図》(No.5)のような軽妙な作品を制作した。

ひるがえって、諸学諸芸に通じた茶人の才能にも目を向け、村田珠光、紹鷗、利休(No.3)はもとより、織田有楽斎、小堀遠州らの肖像画、木造肖像彫刻を写して、各々の人物像に迫ろうとした。とりわけ、和漢にわたる広い教養を身につけた藤村庸軒には尊敬の念を寄せていたようで、その詞章に取材した《庸軒茶博赴堅田詩幅・同図》(No.7)は、右幅に「近江堅田に赴く紀行五十韻」を書写し、左幅にはその詩意に添って、琵琶湖の景勝地として名高い浮御堂の景を水墨で表した対幅の名品である。

本展覧会では、以上のような鉄斎が揮毫した茶の湯にまつわる書画と、あわせて清水焼の陶工・四代清水六兵衛(No.13、14、16)、指物師・中島菊斎(No.23)、釜師・三代高木治良兵衛(No.26)、陶芸家・二代諏訪蘇山(No.25)といった京都の名工と合作した道具類を紹介する。本稿では言及しきれなかったが、鉄斎は千家十職のうち指物師の駒沢利斎、柄杓師の黒田正玄らとも親交を持っていて、こうした事跡は未だ多くが語られていない。本展を機に、茶の湯に関わる鉄斎作品・資料に注目が集まれば幸いである。

(柏木 知子)

#### [主要参考文献]

村越英明「縦横無尽 鉄斎の書入れ本 上・下」(『日本美術工芸』第682-683号、1995年)。別役恭子「浮田一蕙の「北野大茶湯之図」(下)」(『茶道雑誌』第59巻第10号、1995年)。谷端昭夫『茶話指月集を読む』(淡交社、2002年)。奥田素子「鉄斎-多彩な画題-多様な画風IV-」展出品目録(鉄斎美術館、2011年)。堺市博物館「富岡鉄斎-和泉国茅渚海畔の寓居にて-」(2017年)。

## 《出品目録》

### [書画]

すべて富岡鉄斎筆

番号	名 称	制作年	年 齢	寸 法(縦×横)	材質・技法	員 数
1	菟道製茶図・粟田陶窯図	明治2 (1869)	34	各130.0×44.4	統本淡彩	対幅
2	茶事秘録豊公秘話図	明治時代	40代	34.1×44.7	統本着色	1幅
3	千利休像	明治時代	40代	98.3×48.5	紙本淡彩	1幅
4	北野旧東陽坊図	明治34 (1901)	66	29.0×49.0	紙本墨画	1幅
5	宗旦狐図	明治時代	60代	136.5×31.2	紙本淡彩	1幅
6	北野大茶湯図	明治40 (1907)	72	59.0×183.7	紙本金地着色	1面
7	庸軒茶博赴堅田詩幅・同図	明治44 (1911)	76	各113.5×29.8	紙本墨書・墨画	対幅
8	梅山幽趣図	大正4 (1915)	80	130.0×42.0	絹本着色	1幅
9	休師訪ノ貫図	大正4 (1915)	80	129.4×64.3	紙本墨画	1幅

### [器玩]

番号	名 称	作 者	制作年	寸 法(縦×横×高)	員 数
10	寿字陶鼎	初代浅見五郎介作・富岡鉄斎筆	慶応3 (1867)	24.4×24.4×22.5	1基
11	瓢德利 銘雖小	富岡鉄斎筆	明治33 (1900)	8.0×8.0×15.0	1提
12	狸絵捏茶碗	富岡春子作・富岡鉄斎筆	明治時代	10.0×10.0×6.0	1口
13	羅漢図磁鉢	四代清水六兵衛作・富岡鉄斎筆	明治時代	18.2×18.2×9.6	1口
14	菊絵茶碗	四代清水六兵衛作・富岡鉄斎筆	明治～大正時代	13.7×13.7×5.5	1口
15	茶杓 銘野々宮	富岡鉄斎作	明治～大正時代	長18.1 巾1.9	1本
16	南山之寿字オランダ写鉢	四代清水六兵衛作・富岡鉄斎筆	明治～大正時代	23.4×23.4×9.6	1口
17	富岳図茶碗	「楽」印・富岡鉄斎筆	明治～大正時代	11.0×11.0×7.5	1口
18	吉野山絵茶碗	英昌堂泰山作・富岡鉄斎筆	大正時代	12.7×12.7×8.6	1口
19	蝶絵溜箔薄桐香合	象彦製・富岡鉄斎原跡	大正7 (1918)	8.0×8.0×2.1	1合
20	古桐炉縁	杉山芦流作・富岡鉄斎筆	大正8 (1919)	42.6×42.6×6.6	1基
21	田家早梅図茶碗	富岡春子作・富岡鉄斎筆	大正8 (1919)	11.8×11.8×6.2	1口
22	蓮絵茶碗	英昌堂泰山作・富岡鉄斎筆	大正10 (1921)	12.1×12.1×8.7	1口
23	木雕扇式菓子器	中島菊齋作・富岡鉄斎筆	大正11 (1922)	27.4×32.5×7.5	1口
24	木米隠栖図竹棗	作者不詳・富岡鉄斎筆	大正11 (1922)	7.9×7.9×5.5	1合
25	青華香合	二代諏訪蘇山作・富岡鉄斎筆	大正12 (1923)	6.7×6.7×3.2	1合
26	松絵釜 銘松風	三代高木治良兵衛作・富岡鉄斎原跡	大正12 (1923)	23.4×23.4×20.6	1口
27	匏菓子器	豊齋作・富岡鉄斎筆	大正13 (1924)	21.5×21.5×17.0	1口

### [遺愛品]

番号	名 称	作者ほか	制作年	寸 法	員 数
28	白菊香合	伝東陽坊長盛作		5.2×5.2×4.1	1合
29	茶杓 銘鳩乃峰	高田新助作・富岡春子筆	大正元 (1912)	長18.5 巾1.0	1本
30	茶話指月集	久須美疎安著	元禄14 (1701)	25.7×18.3	1冊

### ・次回展覧会

「鉄斎の花鳥画」

前期：2019年6月28日(金)～8月1日(木)

後期：2019年8月19日(月)～10月1日(火)

会場：鉄斎美術館別館「史料館」

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

〒665-0837 兵庫県宝塚市米谷字清シ1番地 Tel.0797-84-9600 Fax.0797-84-6699 <http://kiyoshikojin.or.jp>

平成31年4月3日 印施